

俺の暴力を力づくでも止めてほしかった

平成 30 年 10 月 15 日記

8 月 5 日、母親が一人で相談に来た。共働きの家庭だった。中学 3 年の長男が小学 5 年から行き渋りが始まり、中学 2 年の 2 学期から完全に不登校になった。小 6 の時心療内科にかかり WISC -Ⅲの検査を受け、言葉での表現がうまくできないと言われた。中 2 の時には暴力がひどくなったので、県の児童相談所にも行った。二人の姉たちは共に高校を早々に中退して家を出た。どうしてですか？と聞くと、家を出る程父親とは考え方が合わなかったと答えた。現在、22 歳と 19 歳の姉は共に既婚。父親は実家に別居している。

その後週 2 回のペースで、本人と姉たち、父親と別々にじっくり話を聴いた。両親は相談の長男が生まれた頃から不仲が始まり、子ども達の前で子ども構わずお罵り合い、暴力も激しく、勝手に家を飛び出ては不安な日々だったと言う。家族全員の心理テストも採った。

10 月中旬、両親同席を条件に面談し、夫婦の和解が彼の登校の条件と伝えた。勿論、事前に彼の同意を得ていた。姉たちも賛成してくれた。両親は意外な提案に戸惑いながらも、不承不承に同意した。

翌日の月曜日から彼の登校が始まった。しかし、両親は変わらず。約束を守らない両親に、彼は再び苛立ち、欠席するようになった。私はやむなく彼に、当教室で平日出席認定を取りながら学習することを提案した。彼は同意した。姉たちの父親への不満がぶり返した。

12 月初旬当事務局に彼と両親を呼んで、話し合った。彼の不登校を責める両親に、約束を守らない親への彼の罵声が始まった。「どうしてお前の不登校に、親の仲直りが関係あるんだ！」と怒鳴った。「くそ親父の馬鹿野郎！」と彼は父親に殴り掛かった。とっさに私は彼の腕と胸ぐらを掴み、ドンと壁に押し付けた。「親に向かって『くそ親父』とはなんだ！暴力は許せん！」私は彼に怒鳴り返した。彼の目から大粒の涙が流れた。「ありがとう！先生」。意外な言葉だった。「親父よー、俺は、グジュ、俺は、苛々して殴ったり暴れてしまう俺をさあ、グジュ、先生のようにさあ、力づくでも止めてほしかった」。両親は暫くあっけにと取られていた。

分かっている、暴れてしまう。殴ってしまう。物を壊してしまう。暴走する俺を、身を挺して俺の親父は止めてくれる。俺の親父はそんな父親であってほしい、と。

私は彼に 1 ヶ月寮のある私立中学の体験入学を提案した。彼が入校して 2 週間後、父親から電話があった。「明日うちのと一緒に、子どもの様子を見に行っ

でもいいですかね?」、「本人が同意すれば」と答えた。あれほど罵り合った仲が、2週間で親の方が子どもの存在の大きさに居たたまれなくなった。実は子どもの方もそれ以上の気持ちになっていた。互いに僅か2週間ぶりの再会を確かめ合った。

昔からよく言ったものである、「子は鎧（かすがい）」と。これを機に、夫婦の和解、親子の和解が始まり、父親は実家から自宅に戻った。彼はそのままその中学校を卒業し、高校に進学。専門学校で調理師免許を取得し、県内のホテルで働いている。